

# こまざわ 経済通信

発行  
駒澤大学経済学部  
同窓会  
〒154-8525  
東京都世田谷区駒沢  
1-23-1

## 卒業おめでとう!

ご卒業おめでとうございます。駒澤大学の卒業生の一人として、また一人の社会人として、これから皆さんと一緒に新しい日本を築いていけますことは何よりの喜びです。

剣豪宮本武蔵は、「我以外皆我師」との言葉を残しています。謙虚な「学ぶ心」の大切さを語るこの言葉を、新しい門出のお祝いとして同窓会から皆さんにお贈りします。

社会に出ますと、最初は誰でも未熟な立場になります。しかし謙虚に学ぶ心を持ち続けていますと、皆さんも自然と人物として評価されていきます。そして将来大成してもこの学ぶ姿勢を決して忘れないことが大切です。

同窓会は卒業生が集う組織ですが、過ぎし日のノスタルジーを語るという場ではなく、先輩から様々な人生訓を得そして発露し、未来に向けて人を育てることができる場です。

皆さん、是非同窓会に入り、共に社会に貢献していこうではありませんか。



経済学部同窓会会長  
大場やすのぶ会長

## 新しい時代に向かう経済学部

平成30年4月より、経済学部に5名の先生が就任します。経済学部は教授陣の急激な世代交代と教育改革によって新しい時代に向かって大きく変貌しています。

新任(平成30年4月～)

山中達也 専任講師(新興国経済論)

高野 学 教授(原価計算論)

大野哲明 教授(流通経済論)

北條雅一 教授(教育経済論)

羽島有紀 専任講師(経済理論)

## 名誉教授シリーズ



清水 卓 先生

駒澤大学経済学部同窓会の会報の名誉教授シリーズに投稿依頼を受けたとき、退職してまだ2年弱しか経過していない私が執筆することにためらいがあり、丁重にお断りした。しかし、声をかけてくださった先輩教員の、順番が回ってきたので問題ありませんとの説明で、軽率にも引き受けてしまった。そこで、先輩の先生方の論稿を振り返ってみてみた。googleで「こまざわ経済通信」を検索すると、簡単にアクセスできた。在職中の教学関係資料は大方処分してしまったので大助かりだった。

名誉教授シリーズの第一回は、2009年8月発行の第23号であった。遠藤孝先生の執筆であり、表題には「名誉教授シリーズ(1)」と明記されている。ただし、第2回目以降には通し番号が見当たらない。第24号では、飯岡透先生(故人)、佐藤俊明先生、寺中良二先生(故人)が執筆されている。このうち、先の遠藤先生、飯岡先生、さらに26号の古庄正先生の論稿では、1949年の新制大学発足に伴い設置された商経学部からはじまり、高

度成長下の大学拡大期、1965年の経済学部設置(経済学科、商学科、第二部経済学科)、60年代後半の「学闘紛争」、それを契機とした学部自治会結成、教員側では、「刷新委員会」から始まる学部教授会・全学教授会による教授会自治の確立、学部長公選制導入、1974年の教職員組合結成など大学の民主化・近代化の進展、その頂点として1985年の寄付行為改正による学長公選制導入などが、熱く語られている。これらの論稿には、先生方の世代が自ら担った駒澤大学改革の歴史的意義を後世に残しておこうという情熱が感じられた。

その上で、私に何が書けるかを考えた結果、大学や学部のその後の動きについて触れておこうと思に至った。

1985年の学長公選制導入から2013年の新寄付行為発効に至る期間のことである。70年代から80年代前半が、駒澤大学の民主化・近代化に向けての改革期であったとすると、そうして確立した公選学長を中心とした「新生」駒澤大学と経済学部が、更なる発展を目指す取り組みが行われた期間であるといえる。多岐にわたるその取り組みを要約・紹介することは難しいが、独断と偏見を恐れず、四つの項目にまとめてみよう。

第一に、大学を取り巻く環境の変化がある。85年のプラザ合意を機としたバブル経済、進学人口の増加、受験生数の増加などで、大学経営もそれに巻き込まれていった。入学定員増で財政収入も増え、受験競争の激化で入学生の学力向上が実感され、学内の教育研究環境の改善が進んだ幸福な時期であった。このバブルがはじけた91年以降、我が国経済・社会は、失われた20年といわれる停滞期に入る。このような困難な時代となっても、首都の有力私大として学生数を確保できたわが大学では、文科省が許容した入学定員増もあいまって、大学経営自体が困難に陥ることはなかった。むしろ、校地の再開発を含め大学の規模拡大を志向するゆとりさえあったのである。委細は省略するが、そうした規模拡大への傾斜が、その後の巨額投資破綻を生む一要因となったことは記憶にとどめるべきだろう。

第二に、文科省主導の教育改革とそれへの対応である。そのハイライトは、大学設置基準の大綱化を契機とする本格的カリキュラム改革であり、これは1996年に実施された。この時に制度化されたのが現在も維持されている全学共通科目と専門科目、さらにこの両者から自由に選択できる科目群からなる卒業必要単位の仕組みである。このカリキュラムの基本は制定されてから既に20年以上経過しており、その仕組み自体の是非について検証する必要があるかもしれない。いうまでもなく、カリキュラムの基本的仕組みは変化がなかったとしても、開設科目については繰り返し見直しされてきた。専門科目では時代と共に変化する経済に対応して刷新されてきたし、全学共通科目では初年次教育という新たなコンセプトに基づき科目も新設された。

第三に、教育改革のもう一つの課題としての教育の質の向上が、これも文科省主導の法制化を含む規制の強化に従って行われた。脚下照顧という大学の現状に関する自己検証、それに基づく評価・認証といった手段で、大学の自己改革が強制された。学生による授業評価、詳細な年間授業計画(シラバス)の作成、自己点検評価・認証制度の厳格化に止まらず、グローバル化への対応、初年次教育、アクティブ・ラーニング等々、教育方法の詳細にまで立ち入った規制の網がかぶせられるようになった。入学、教育課程、卒業資格にかかわる3つのポリシーの明文化もその一環である。実業界の要請に応じる便利な人材の育成がその究極的目的であると考えざるをえない。改革のこうした方向性が、大学の自治・学問の自由を次第に没食し、その形骸化が進行しているのではないかと危惧される。

大学を国家目的に従属させる典型例として、軍学共同の推進の動きがある。高等教育への財政支出を抑制する一方、多額の予算で軍事研究を促す動きが顕著であり、幸いというか日本学術会議はそれに警戒心を忘れてはいないが、本学もいつまでも蚊帳の外というわけにはいくまい。

第四に、大学改革の柱として、管理運営の強化が国主導で図られてきた。教授会権限をより制約し、理事会への権限集中を図る動きである。巨額損失を発生させたそれまでの本学のガバナンスに問題があったことは事実だが、近年行われた理事会強化を目的とする寄付行為改正の方向性には強い危惧を抱かざるを得ない。学術文化の発展は、基本的人権と自由を基盤とすべきであるとする。

以上、駒澤大学の現在の在り方に注文を付ける形になったが、それは、大学を取り巻く内外の動きが、80年代までの民主化・近代化の取り組みが目指した方向とは異なるのではないかと感じたからである。冒頭に紹介した諸先輩が現状に直面したら私と同様の感懐を抱くのではないだろうか。とはいえ、教育研究の現場から離れた現在では、より良い大学作りの実践は、現役の教員と職員諸氏に期待せざるをえない。実際に、創意工夫に満ちた教育改善のための様々な取り組みを知り喜ばしく思っている。いまさら余計な口出しをするなどのご意見があるかもしれないが、駒澤大学経済学部の一時代についての証言記録として、受け止めていただけたら幸いである。

## 卒業生シリーズ

### 「永平寺参籠」

小出完爾（昭和43年卒）

永平寺参籠は、私達にとって身の引き締まるものとなり、勤行の先を知る良い旅でした。

宿泊にあたって、雲水の方からの決まり事の説明や、施設を利用する者の心の持ち方、例えばお世話になるトイレや洗面所などに宿る神様に礼を尽くすこと、そして夕食の案内には、食事が出来ることの有り難さと作法について、雲水からの説明が実に簡素で穏やかな話し方に、雲水に行脚が感じられ、永平寺が導いているものの大きさが感じられた。

私達は、平成二十六年に矢吹敏雄名誉教授の二十三回忌の記念とした行事を済ませ、改めて、矢吹先生を思い起こせば、昭和三十四年に藤田俊訓学監に請われて赴任され、藤田先生が目指す改革復興への思いを相照らすこととして、駒大の発展に渾身の取り組みをされました。

矢吹先生はなぜあれほどのエネルギーを駒澤大学に注がれたのか、OB矢吹会の中でも「なるほど」とはなりません。記念誌発行に当たって、依頼申し上げてお寄せ下さった雨宮真也元学長の原稿の文中に「駒澤大学を愛する心が迸り出て」と語られておりますが、矢吹先生の迸るような情熱のもとになったものは何であったのか。参籠二日目の朝、法堂での読経に参加すると、一糸乱れない雲水達の勤行の姿に目を見張りましたが、少し時間が経つと雲水達の視線の先が、経文勤行などの他は、その視線の先は、正面の仏殿にあり、仏殿の仏様は、概ね六十名位の雲水達の集中した視線をお受けになられている様子に伺えた。今、法堂での雲水達の集中した勤行の視線の先には、信頼があっても良い。

矢吹敏雄先生は、常々「アータ達は、やればできるのであります。」と信頼され、駒大生は成長していった。参籠で得られたものは、本当に多くありました。

参籠者、伊藤吉次、平田次弘(会長)、北澤文彦(副会長)、伊草正、石塚武、小谷野浩治、小出完爾





## 研究室訪問シリーズ



堀内 健一  
(准教授、経済理論A・B担当、2016年着任)



着任1年目から経済学部のソフトボール大会運営委員として、同窓会のみなさまにはお世話になっております。日頃から現役学生へのご支援を賜わり、御礼を申し上げます。

学部の講義では経済学科の必修科目(配当年次1年)となる経済理論A・資本の原理と、専門科目となる経済理論B・経済システムの原理を担当しています。

経済理論Aでは、資本主義経済の基本的しくみについて講義をしています。商品・貨幣・資本・信用、貸金・利潤・利子・地代といった現代社会の経済的な範疇を人間の生産活動・労働を出発点にして明らかにしています。主に『資本論』の内容がベースになっています。

経済理論Bでは、理論Aで展開されている内容に関連して、現状の具体的な諸問題について理論的分析を進めていきます。兌換停止や金ドル交換停止という事態をインターフェースとして入れて、データや資料等をできるだけ多く活用しながら、現代経済の根本的な解明と、経済理論の実証を試みています。私の専門分野となる貨幣・金融システムのしくみが中心です。「マネー資本主義」とも呼ばれる現代を、アメリカを軸とした国際通貨体制(ドル体制)の枠組みから理解します。さらに資本主義経済における生産力の発展と富の増大が現代においてどのように現れ、それがどのような問題を生み出すのかを論じています。とくに「長期停滞」と呼ばれる現代の日本経済を戦後の資本蓄積の動向と金融のありかたという枠組みから分析しています。1990年代以降、企業の実物投資は停滞し、不安定雇用の増大、実質賃金の下落といった人々の労働や生活の条件悪化、一方で資金余剰とその結果である利子率の超低位安定が構造的に現れるようになりました。この諸要因と歴史的意味をマルクスの経済学分析の枠組みから明らかにしています。

ゼミでは、この経済理論Bのテーマと同じで、できるだけ最新の現状が分かる文献を輪読しています。今年度は『ブロックチェーンの未来—金融・産業・社会はどう変わるのか—』、『「公益」資本主義—英米型資本主義の終焉』などを読みました。同窓会のみなさまにもご協力・ご参加を頂いている学生シンポジウムでは今年度は2年生の3つのグループが発表をし、良い経験を積んでいます。テーマは学生が自主的に選んだもので「消費増税に対する懸念」、「学生が苦しむブラックバイト」、「日本の雇用システムと今後の課題」でした。春からサブゼミで準備に取りかかり、夏合宿での中間発表、11月の予行演習・本番までの過程で、ゼミ生たちが3年生の力も借りながらグンと成長していくさまは頼もしいかぎりです。

卒業研究のために研究室にやって来る4年生には、コーヒー豆の挽き方とドリップの仕方をマスターしてもらい、おいしいコーヒーを自分で淹れてもらっています。「プロフェッショナル 仕事の流儀」(NHK)でも放映された「カフェ・パッハ」で仕入れられているコーヒー豆です。本当のコーヒーがここにあります。コーヒーをのみながら学生たちと議論している時には研究室を「喫茶隠れん房」と呼んでいます。

膨大な業績を残したマルクスですが、一番言いたかったことはこんなことだろうと思っています。「本当のことを精根尽くして知ろう。そして、自分の頭でとことん考えろ！」目の前に残されている刊行後150年の『資本論』を眺めながら、自分に言い聞かせつつ、学生にもその心を伝えていきたいと思っています。



ゼ ミ 紹 介  
岩 波 ゼ ミ

高橋和紀（経済学科4年）

岩波ゼミでは、主に企業管理論（経営管理論）を学んでいます。企業管理論と一口にいても研究することはさまざまです。岩波先生の専門分野であるトップ・マネジメント機能の現代的特徴を学習・研究しています。2年次では企業経営の基礎をグループで学習しレジュメを作成し、発表・ディスカッションします。基礎学習を通じて企業経営について幅広く知識をつけることで、3年次には企業経営で必要な管理機能について、CSRやコーポレート・ガバナンスといった経営者機能をめぐる専門的視点からより深く学習・研究しています。ゼミでは指定文献を読み毎週グループ発表とディスカッションを行います。私たちの3年次の輪読文献は『How Google Works ・私たちの働き方とマネジメント』でした。4年次では経済学部で学んだ科目やゼミでの学習内容に基づいて、大学で学びの集大成である卒業論文へと繋げてきました。コンプライアンスを重視することは当然のこととして、社会の発展と企業成長を同時に実現するために、社会の中でそれぞれの企業経営がどうあるべきかというゼミ生共通の問題意識に基づき、ゼミの仲間たちはそれぞれ研究課題を設定し、卒業研究を行ってきました。

2017年度の卒業生の就職状況は多種多様で、金融業界や広告業界、IT業界や不動産業界、公務員というように岩波ゼミではそれぞれのメンバーが大学で学んだことを通じて興味のある方向で進路を決めています。就職活動中も度々ゼミのメンバーで集まり意見交換をします。先生もゼミ生の進路を応援してくれます。ゼミ同窓会は特に設けていませんが、恒例となっている夏期ゼミ合宿が学年を超えた合同合宿のため、日常でも他学年の岩波ゼミ生と親交があり、仲がいいと思っています。このことは、岩波ゼミを卒業された諸先輩方と同様だと思います。実際に社会人として活躍なさっている卒業生の先輩方たちと会う機会を設け、就職活動のアドバイスをいただいています。

学業以外でもゼミ生で交流する機会は多いと思います。ゼミ活動として春期と夏期のゼミ合宿以外にも、経済学部主催のソフトボール大会やゼミ連主催のスポーツ大会に出場しています。また長期の春休みを活かしてゼミ生有志でスノーボード旅行に行ったり、休日にドライブに出かけたりしています。岩波ゼミの諸先輩方もご存知だと思いますが、先生もゼミ生の交流に寛容で時にはお酒を酌み交わし談笑します。岩波ゼミでは学業の他にも学生生活を謳歌できる環境があります。



## 第3回学生シンポジウムを開催しました

小 森 恵 一 (経済学部ゼミナール連合会議長)

第3回学生シンポジウムの運営委員を代表してご挨拶させていただきます。まずは今回の学生シンポジウムを大きな混乱もなく無事に開催できたことに安堵しています。これも同窓会の方々のご支援なくしては出来なかったことだと感じています。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

運営委員として学生シンポジウムに関わった感想としましては、2016年度の学生代表からバトンタッチされて、準備が本格的にスタートしたのが4月の事でした。私自身は学生シンポジウムに関わるのが初めての経験だったので右も左も分からない状態でした。ただ、前年の経験があるメンバーが運営委員の中にいましたので、協力しながらより良い学生シンポジウムになるように工夫しました。一例としては、学生により身近に感じてもらえるようなイベントを目指して、参加募集や連絡をソーシャルネットワークサービスで行うこととしました。もちろん運営委員の中でも意見は対立し、順風満帆のプロセスとはいきませんでした。遠慮して意見が言えない状態よりも、学生シンポジウムをより良いものにしたいという思いから、お互いに意見をぶつけ合う形になって良かったと感じております。

また、運営委員は各ゼミのチームの一員として当日の発表準備も行っていました。私のチームは中々メンバーからの意見がなく、当日発表に加われるかどうか分からない私にとっては、大変不安でした。しかし、9月頃からはメンバーもどんどん意見を出し合うようになり、当日も無事に発表できました。

運営代表は休日返上で動くこともあり、大変だと思うこともしばしばありました。ただ、試行錯誤しながら一つのイベントを様々な人たちと動かす醍醐味や、終了した時の達成感は何事にも代えられない大きな財産になったと感じています。来年度以降の学生シンポジウムが更に良いものになることを願っています。



### 同窓会後援ソフトボール大会の中止について

2017年10月15日(日)に開催が予定されていた第27回ゼミ対抗ソフトボール大会は、経済学部同窓会も協力し準備を進めてきましたが、悪天候のため残念ながら中止となりました。予定されていた参加チームは18チーム、参加登録人数は483名でした。また、あらかじめ10名の学生が審判員と運営補助員に割り与えられておりましたが、早朝における大会中止の連絡も彼らに担当してもらいました。同窓会としては、彼らの労をねぎらうため謝礼金を支払うことにしました。来年度は無事にソフトボール大会が開催されるよう願うばかりです。

## 第8回経済学部同窓会総会の開催 経済学部ゼミナール連合会主催の「学生シンポジウム」にも参加

第8回経済学部同窓会総会が、2017年11月19日(日)の10時から駒澤大学深沢キャンパスにて開催されました。

大場やすのぶ会長の挨拶にはじまり、経済学部長挨拶、事業報告、監査報告、事業計画、予算案、役員選出、新役員挨拶と議事が進行し、会員からの意見や要望も出され、活発な議論が交わされた結果、すべての議事が承認されました。経済学部長代田純先生からは、12月に竣工となった開校130周年記念棟「種月館」についての説明があり、出席者は駒澤大学の今後に思いをめぐらせ、熱心に耳を傾けていました。

総会終了後は、経済学部ゼミナール連合会主催の「学生シンポジウム」とその後の懇親会に参加しました。同窓生は学生の報告に対して適宜コメントを出し、シンポジウムは大いに活気づきました。

次回総会は3年後の2020年に開催されます。さらに盛大な集まりとなるよう役員一同努力します。会員の皆さまにもいっそうのお力添えをお願い致します。



### 同窓会事務局からのお知らせ

**同窓会組織の強化にご協力ください**

同級生、ゼミやサークルの仲間、地域のお知り合いで「経済学部同窓会」に加入していない方がおられましたらご紹介ください。未加入の方に事務局から入会案内をお送りします。

**「こまざわ経済通信」の原稿募集**

同窓会報の充実のため原稿を募集しています。積極的なご投稿をお願い致します。

- ・ 論 題：自由
- ・ 字 数：800字以内
- ・ 送付先：駒澤大学経済学部同窓会事務局（下記）  
原稿の採否は事務局にご一任ください。

**役員を募集しています**

ボランティアで同窓会の仕事をしていただける方を募集しています。

軽い仕事なのでご負担になることはありません。

仲間と楽しみながら、同窓会と経済学部の発展ために貢献できます。

有志の方は事務局までご連絡ください。

経済学部同窓会事務局（経済学部事務室内）

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1

電話：03-3418-9343